

# 米欧亜回覧

第71号

発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集委員会

## 七月二十五日(木)、保阪正康氏講演

### 「国政選挙の理想と現実」、参院選を終えて

保阪氏は高名なノンフィクション作家であり、昭和史の第一人者とされる。「陸軍の研究」や「あの戦争はなんだったか」を知るために三千人に取材した話は有名。

著作には「昭和陸軍の研究(上・下)」、「吉田茂という逆説」、「昭和天皇(上・下)」など数々があり、最近では五月に自伝的作品「風来記」わが昭和史(一)「青春の巻」を平凡社から出版された。



全体例会 (4月14日国際文化会館)

### 「国政選挙の理想と現実」、参院選を終えて

今回は、七月二十三日の参議院議員選挙の結果を踏まえ、その問題点を探りながら戦後日本の民主主義の根幹についても論じていただく予定。どうぞ奮ってご参加ください。

#### 四月全体例会開催

#### NPO年次総会と講演会

四月十四日、国際文化会館にて平成二十五年度最初の全体例会が開催された。

第一部の年次会員総会では、平成二十四年度の事業報告と会計報告および平成二十五年度の事業計画、収支計画、役員の変更などの発表と審議が行われ、承認された。

続く第二部では、「米国流アベノミックスの盲点」『法』に目覚めると『真』に元気になる!』をテーマとした、上村達男氏(早稲田大学教授)の講演会が行われた。タイムリーで興味深い講演に、活発な質問や意見が終了時間まで続いた。

(詳細は二・三頁、別刷)

### グローバルジャパン研究会 新テーマで八月より再開!

グローバルジャパン研究会はしばらくお休みしておりましたが、八月下旬より再開することになった。この部会は、長らく「現未来部会」と称して、歴史部会に対して現代と未来を語ろうという位置づけだったのが、十周年記念の国際シンポジウム開催を契機に、そのテーマである「世界の中の日本を考える」を踏襲する形で、グローバルジャパン研究会と衣替えし今日にいたっている。

(詳細は三頁)

### 今夏も開催

#### 納涼と映画鑑賞の会」案内

昨年に続き、七月四・五日(一泊二日)、奥多摩園で開催する。主催は、実記を読む会(実施担当橋本吉信)、共催、歴史部会、英訳実記を読む会。参加費一万円。

### ◇映画鑑賞

- ①「会議は踊る」1931年独作品
- ②「ヴィクトリア女王・世紀の恋」2009年英米合作
- ③「英国王のスピーチ」2010年英国作品

映画鑑賞後に懇親会を予定、新装オープンした庭園、溪流、清流ノ滝散策も楽しめる。

周知の通り、幕末から明治初年にかけて西洋文明をつぶさに見て歩き、本質まで洞察した人物が二人いた。福澤諭吉と久米邦武である。が、この二人は色々な面で対照的だった。

### 福澤諭吉と久米邦武

泉 三郎

福澤は小藩の下級武士の出身で早くして父を失い貧窮の中で苦勞して育った。「封建制は親の仇でござる」との念が強く理不尽な身分制への反撥は強烈だった。そこで新しい学問である蘭学・英学を志して活路を見出し、果敢に海外渡航の機会を掴んでいく。そこにはヤンチャで抜け目なく、したたかたでタフな福澤がいた。

を追求すべし」と。かたや、久米は東西の文明をむしろ冷静に比較考量した。そしてこう分析する「西洋は利欲をとことん追求する。西洋の政治は利益保護を目的とする」と。そして東洋(中国と日本の意)を「道義国家」とし、米欧諸国を「町人国家」と呼んだ。しかし、久米は開明君主と父の影響で技術と経済の重要性をよく認識しており、内に儒教的道義を堅持しながら、技術や経済は積極的に摂取すべきだと考えた。

福澤は目標とすべき「文明」を光かがやくものとみ、「文明」とは衣食を豊かにし、人品を高尚にすることなり」といつた。一方、久米は「政治の務るは、国中の人民、みな生業に勉勵し、自主を遂げ、交際に礼あり、信ありて、百需の利を開き、外は国威を屈せず、内は国安を保し、太平の域に進むことこそ務べき本領なり」といつている。

この二人の言葉は日本近代化の始点における政治の目標をニュアンスは違え明快に示している。百四十年後の今日、もう一度よく噛みしめてみる必要があると思う。

第67回 全体例会

NPO年次総会に続き、講演会  
「米国流アベノミックスの盲点」  
「法」に目覚めると「真」に元気になる！

平成二十五年度最初の全体例会は、四月十四日(日)午後一時三十分より国際文化会館講堂で開催された。今回はNPO法人としての年度替りの総会を兼ねるため、平成二十四年度の事業報告と会計報告および平成二十五年度の事業計画、収支計画、役員の仕事などの発表と審議が行われた。

【第一部】年次会員総会

総会に先立ち出席者の確認が行われた。正会員数二百二十名、出席者九十一名(うち書面表決者五十八名)となり、正会員の半数以上の出席を得て総会は有効に成立した。

まず、議長に泉三郎理事長を選出、議事に入った。議題及び審議の内容は以下のとおりである。

①理事長の挨拶と二十五年度議題



泉理事長

の会の方針について

②楠木監事より書面による二十四年度の会計監査報告

③平成二十四年度の事業報告ならびに決算承認について

④平成二十五年度の事業計画ならびに収支予算について

⑤役員重任について

■参照資料の配布  
平成二十四年度(二〇一二年)活動報告および会計収支計算書(平成二十四年四月)

「平成二十五年三月」、「米欧亜回覧の会」平成二十五年度(二〇一三年度)事業計画書および会計収支計算書(平成二十五年四月)

平成二十六年三月)等の資料が出席者に配布された。

(参照資料詳細は別紙)

■審議内容

①会の設立十五周年となる昨年度は岩倉使節団の百四十周年にもあたり、一昨年度より取り組んできた「十五周年記念小論集」も会員各位のご協力と山田、小野、中山各氏をはじめ小論集編集委員会メンバーのご尽力により、昨年八月に発刊する事が出来、記念すべき一頁となった。会から小論集を贈呈した識者か



石垣事務局長

らは、「大変立派な研究成果で、さらに会として研究活動を深めて欲しい」との多くのコメントをいただいた。今後の有志の集まりの中で方向性を検討したい、また新人の加入で活性化しつつある各部会の活動に加えて、会員各位のさらに積極的な参画をお願いしたい。

②二十四年度の事業ならびに会計報告につき適正であると監事報告が書面で提出され、事務局長が代読した。

③資料により詳細説明、審議の結果承認された。

④資料と各部会の幹事からの詳細説明、審議の結果承認された。

⑤重任理事(四名)：泉三郎、塚本弘、近藤義彦、石垣禎信と重任監事(二名)：楠木孝雄がそれぞれ承認された。

(文責) 石垣 禎信

【第二部】講演会

講師・早稲田大学教授 上村達男氏

■テーマ

「米国流アベノミックスの盲点」 「法」に目覚めると

「真」に元気になる！

昨年十二月に誕生した自民党安倍政権の順調な政権運営、特にアベノミックスと呼ばれる脱デフレと日本再生戦略が機能し始めたと見える昨今、当会でも何回かご指導をいただいている上村教授を迎え、上記テーマで講演会が行われた。誠にタイムリーな企画で、上村教授からの興味深い講演に、会場からも活発な質問や意見が続き、年次総会に相応しい知的かつ創造的な講演会となった。

■発表要旨

上村教授には二〇一〇年九月に、「日本文化の精髓『比較法』からの発信」グローバルな金融危機にも申す」と題しグローバルジャパン研究会でご講演いただいた。

「リーマンショックの後の世界金融危機の最中、日本はもつとリーダーシップを発揮すべき、且つできる」と云う内容で、大変元気をいただいた印象深い講演であった。

今回はその実践編とも言えるべき内容で、今話題のアベノミックスを真に機能させ、日本が元気になるためには、日本の政治家、官僚、そして国民が「法」に目覚めなければならぬと云うのが上村教授の主張である。

昨年末の自民党安倍政権発足以来、いわゆる「アベノミ

クス」が比較的順調に動き出しているように見えるが、これは日本中(あるいは世界中?)が「空気を讀んでる」状況にすぎない。数々の日本を再生させるための金融政策、財政政策、経済政策が発表され、実施に移されつつあるが、米国流アベノミックスの盲点は、民主主義市場経済を運営しうる法的条件が欠如していることである。明治以来の近代化の中で富国強「兵」、富国強「財」、と日本は追い付き、追い越せと頑張ってきたが、最後の大きな壁は西洋の「法」であった。欧米の神髄とも言うべき「法」の克服は容易ではない。

例えば「カンパニー」と聞けば、一般の日本人には儲ける事が当たり前のような存在と考えるが、実は西洋の常識では「非営利が当たり前、営利の会社もある」となる。ところが、株式会社として公開された時は、市民に共有される存在として営利を追求しなければいけないとなる。株式会社に対する、「支配と責任 vs 投資」についても直近のサーベラス vs 西武鉄道の例のような、「投資を越えた株主の責任はどこまでか」を巡る常識の不一致が数多く存在する。日本の近代化と「法」につ





講演会講師の上村達男氏

いては、明治以降の法典の編纂の時代(市民法の確立と司法制度、検察制度)と、経済の民主化、証券民主化・・・と云った戦後改革の時代を経たが、今の日本の挑戦は「バブルと戦う法の確立」にある。実は、戦後も証券市場と一体の株式会社制度運用は失敗の連続であった。つまりバブルとの戦いであった。

バブルの怖さとは、企業・金融機関の破たん、失業、社会不安、犯罪、さらには戦争にまで繋がるものであり、「生き馬の目を抜く世界」の法のあり方を問われているのである。つまり「時々刻々のルールメイク」と「時々刻々の法執行」が不可欠となる。

この「持続可能な市場対応型法制度」の確立なしには何事も成功しない。つまり高性能なアクセルの横には高性能なブレーキが不可欠であり、日本再生のため思いっきりアクセルを踏む必要のあるアベ

ノミクスには、この「法」への挑戦が待っている。

アベノミクスに代表される今の世論形成の中心は経済学者だが、あまりにも「経済と法」について無知である。具体的には、アメリカ的自由は最大に見えるが、同時にアメリカには特徴的で厳格な法制度がある。例えば密告報酬制度、SEC、三倍の賠償を請求できる民事制裁、司法取引、おとり、盗聴、等々。アメリカの議論を法的条件が欠落した日本で声高に主張すれば必ず間違える事と、アベノミクスで復活した経済学者の「法の無知」は致命的である。

アクセルと機能強化、規制緩和しか関心が無いため、せつかくの良いアイデアや施策も不正まみれになって挫折する。経済の破綻が呼ぶ更なる規制緩和(病人対策のオンパレード)と制度の内外落差がもたらす日本の富と公益の一方的な流出が最大のリスクである。

本来「法」は明治維新以来、国を挙げての努力の結果、日本の得意分野である。日本人は、日本文化の精髓である「比較法」で証明できる外国法を真摯に学ぶ稀な民族である。今もアジアのリーダーとして、世界から国としてのこの能力を高く評価され

ている。西洋法への批判力・評価力を持ちうる唯一の非西洋国家としてこの機会に「日本と日本人の対外交渉力を著しく高めうる日本法の比較法力」を徹底的に活用すべきである。

アベノミクスの成功は、規律面の改革との同時進行を行った場合のみ

(文責) 石垣 禎信  
(写真) 近藤 義彦

**グローバルジャパン研究会  
新趣向、新テーマで、  
八月より再開!**

今回は、世界がいろいろな意味で、新しい局面を迎えていることに鑑み「世界に通用する新しい日本像を求めて」をテーマに、会員および会員推薦の論者が発表を行い、それを素材に大いに議論する会にした。

第一回は八月二十四日(土)、泉三郎氏が「問題提議」と「一提言」を行う。

なお、当研究会のこれまでの外部講師による発表を列記し参考に供します。

\* 服部英二氏(麗澤大学客員教授、元ユネスコ事務局長特別参与)  
「激動する世界と日本文化」  
\* 上村達男氏(早稲田大学法学部教授)

「日本文化の精髓「比較法」からの発信」。

\* 鬼頭宏氏(上智大学経済学部教授)  
「二十一世紀に活かす文明としての江戸システム」

\* 北沢宏一氏(科学技術振興機構理事)  
「技術は日本を救う」『第四の価値』を指して」

\* 近藤誠一氏(文化庁長官)  
「今こそ日本の文化力を世界に発信しよう!」

\* 中村敦夫氏(俳優、元参議院議員・さきがけ代表)  
「簡素なる国へ、政治をどう変えるか」

**松代、佐久、小諸を巡る  
信州歴史ツアーの記**

今回は、久々の国内歴史ツアーである。会員の井出亜夫さんの発案・企画で、参加者十六名を得て、去る五月十五、十六日の一泊二日間で催行された。各地からそれぞれ新幹線長野駅に集合して、昼食を一緒にとった後、今回の旅の目玉の一つである松代の佐久間象山関連の史跡めぐりから始まった。案内人は、地元ボランティアの佐久間さん。象山のことなら何でも、(漢詩までも)諳んじている方で、最適任者であった。松

ぞうざんと読む)は、幕府海防係の藩主・真田幸貫に、海防八策を上書、それがもとで、黒船打ち払い令の撤廃が実現する。江戸で、象山塾を開き、吉田松陰、高杉晋作、武田斐三郎、小林虎三郎、河井継之助、勝海舟、坂本龍馬、橋本左内、山本覚馬、加藤弘之など幕末の志士多数が入門し、その影響を受けた。象山神社、墓のある蓮乗寺、象山記念館と文武学校(一八五五開校)を見学する。象山の意見で建設された文武学校は、蘭学など文学所(漢方、西洋医学)と、剣術、柔術、弓道、槍術など文武総合学校で、いくつもの畳敷の教室を持ち、広々と開け放して気持ちよく、緑の涼風をしばし楽しみつづ見学した。この地に、終戦間際に、大本営本部を移設する計画があったとは驚きである。岩盤のトーチカで守ろうとした。

次は、一路、上信越道で小諸懐古園に向かう。小諸城址は、広大な敷地内に、藤村記念館、徴古館、小諸義塾記念館、小山敬三美術館などが散在し、夫々に自由散策して新緑を満喫し、夕刻、藤村ゆかりの中棚荘に投宿する。リンゴの湯や露天風呂で暑かった一日の汗をぬぐったあと、夕食の宴会となり、お互いに自己紹介や近況を語り合い、



旧家・井出家の門前にて

終わると藤村の間に、再び集まって、夜のふけるのを忘れて、幕末の志士になったような気分、歴史や政治を語った。翌朝は、風呂へ入ったり、うさぎや羊や鴨や鶏がいる広い庭を散歩したり、千曲川まで歩いたり、水明館を訪れて藤村の気分浸りしたりして、思い思いに朝食前の一時を過ごし、名物の麦とろろ朝食をとって宿を後にして、この日から加わった山田さんの待つ、旧中込学校へ向かう。樹齢百年を超す大藤の満開の花に迎えられる。現存するもともとも古い擬洋風学校の一つで、明治八年に、佐久市の村民の寄付で建設された。ステンドグラスの窓とオルガンのある教室、建物の上に、八角楼があり、太鼓を鳴らして、時を告げた。次に、龍岡城の五稜郭を見る。今は小学

校になつてはいるが、函館の五稜郭と同じ武田斐三郎の設計による。

このあと割烹「花月」で名物の佐久鯉の料理を楽しみ、今回の旅行のもう一つの目玉である、井出さんの実家でもある橘倉酒造を訪ねる。マロニエの花と、庭のボタンと、よく冷えた甘酒に迎えられる。元禄九年の創業の老舗で、代々の戸主と交友のあつた有名人の遺墨が数多く所蔵されている。今回はそのいくつかを展示して見せて頂いた。佐久間象山、勝海舟、大久保利通、三条実美、副島種臣、松方正義、斎藤実、伊東巳代治、浜口雄幸、犬養毅、安部磯雄、田中正造、松村謙三、木戸孝允、伊藤博文など、垂涎の遺芳の数々を心行くまで鑑賞させていだいた。近代の酒造りの映写、酒蔵見物、日本酒の試飲などを楽しみ、惜しみつつ、井出家を後にして、新幹線佐久平駅にて一同解散して旅を終えた。井出さんの名企画と、ご一家を挙げてのおもてなしに感謝したい。

象山をめぐる信濃の薄暑かな  
初夏の風巨樟そよがせ懐古園  
新緑の山峡の宿りんごの湯  
マロニエの花くれないに遺墨展

甘酒や信濃の旅のもてなしに  
(文責) 小野 博正

歴史部会報

担当幹事 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

吹田尚一氏三回連続講演

①日本近現代史の新視点―大東亜戦争を事例として

三月十七日、参加者十七名。多角的分野で活躍の吹田氏は、大東亜戦争の正しい総括をしないと死んでも死にきれないとの熱意で、本講演に臨まれた。

第一回は、まず歴史の考察から始まり、時代が人物を作り、人物がまた時代を作る。学者の考証や因果関係重視と、文学者の人間中心の記述の両者の係りにこそ歴史がある。歴史のみが人間と社会を語る事ができると説く。と

かく、日本の歴史家は、西洋を尺度に語りたがり、価値判断を下すが、歴史は一回限りの事象の連続で、同じ事象が将来起こることはない。近現代史の分析には、基軸に「国家的利益」を置くが良い。国家とはその存在が最高目的であり、明治時代はこの国家的利益追求で一貫していた。大正は国家的利益と国家理性が動揺し、一つに収斂できなかった。昭和は国家理由が優勢となり、国家理性を圧倒した時代とも言えよう。

そこで、日本近現代史を分析するための新視点とは、①まず、日本の近現代を進展させた「動勢」(ドライビング・フォース)を素直に、積極的に評価し、世界史に与えた影響と意味を評価しなす。日本の近現代史を、侵略的帝国主義とか、逆に膨張主義賛美論の二元論ではなく、第三の史観でみることである。②日本の置かれた位置を世界政治・国際関係の中で、どう振る舞ったかに注目する。(日本の大陸進出は、イギリス帝国主義のアジア進出に抗するものとの視点)③世界政治を見るとき、「力の政治」「力の均衡」の視点では、第一次世界大戦以降、日本の台頭をこれ以上は許さないという西列強と、それに独り立ち、独り闘い、圧倒的な相手の前に膝を屈した日本という構図がある。④イギリスに代わって、アメリカ、ドイツ、日本の台頭。資本主義の行き詰まりと大恐慌と列強の保護貿易やブロック化。民族主義の隆盛、共産主義政権の登場などの、「時代」についての認識。⑤日本近代は西欧の追従者となつて独立を保つことと、アジア解放の同志になることとの二重性への考察。⑥西洋と東洋、文明と非文明。脱亜入欧の日本がアジア主義に向かった背景。⑦結局、ハ

ル・ノートの提示により開戦に至ったが、西太平洋での日本の覇権を許さない米国と武士道の高い独立心と矜持の伝統の日本との隔たりが、まさかの戦争を生んだ。⑧戦争遂行は否定するべきだが、その結果生まれた諸国の植民地からの解放と通商の自由の確立で、日本が戦後経済大国に昇りつめた、その結果も含めて近現代史を見直すべきである。

②問われた日本の対外発展のあり方―大正期から昭和初期の時代(第一次世界大戦〜満州国建国まで)

四月二十一日、参加者十六名。

第一次世界大戦は、世界がイギリスとロシアの対立時代から、イギリスとドイツの対立時代に入ったこと。イギリスの隆盛の時代が終わわり、アメリカが世界の政治の主役に登場した。アメリカが、特にアジアの新秩序に関心を抱き、アジアの変動の中心が遅れて来た中国にあり、その正面にある日本の対支関係が内外の問題になりつつある時代背景に注目する。

欧州では、大戦の惨禍の反省から、戦争回避の機運が起ころい、国際連盟、パリ非戦条約、軍縮条約など、多層的な平和・協調路線を歩み始めていた。日本は中国に出撃し、





吹田尚一氏 (写真: 橋本氏)

山東半島、南洋諸島を占拠、二十一か条要求で、日中関係は熱くなっていた。長い間、北の守りの脅威であったロシアと日露協調で、逆にアメリカのアジア進出を牽制し、日英同盟を破棄して、世界のパートナーを失う。

実は、明治四十年に軍部策定の『国防方針』では、仮想敵国を、ロシアに次いで、アメリカを挙げていたのだ。国防方針は、天皇の認可は得たが、首相には回覧・回付のみで、のちの統帥権干犯問題の種を作ってしまった。そして、朝鮮支配を名目に、軍事は増大し、(一九〇〇年國家予算の三十%が国防費)山梨軍縮(大正十一年)と宇垣軍縮(大正十四年)の努力や、ワシントン会議の海軍軍縮もあつたが、一方中国の内政治的混乱で、知日の孫文がロシアに接近、蒋介石の統一政権が誕生し北伐が始まると、陸軍は日本人居留者保護の名の下に、山東出兵、続

いて関東軍による張作霖暗殺事件へとエスカレートしてしまふ。

然し、国際協調派の浜口雄幸は、世界の潮流を戦争回避の方向と見て、中国での内政不干渉、対英米協調外交で、国内は金解禁、産業合理化で市場拡大をすべしと、対華強硬派を抑えて、ロンドン軍縮会議に臨むが、軍部が統帥権干犯を政治問題化することで、國家改造と満蒙問題を一気に解決しようとする国際連盟から脱退して、日本は国際協調路線から離脱して孤立路線を歩むことになる。五・一五事件の犬養毅首相暗殺がその象徴だろう。かくして、良識派・国際協調派の加藤友三郎海相、原敬、幣原、高橋是清など政党政治系政治家がテロで倒れ、また政党腐敗で国民の信頼を得られなくなり、次第に強硬派の軍部が力を得ていく。

③大東亜戦争とは何であったのかー近代史の中の日本近代のあり方を問う

五月十九日、三回目の講義。出席者十五名。いよいよ核心のまともに入る。

第二次世界大戦は誰が勝者で、誰が敗者かわからないのが特徴で世界の地殻変動をもたらし、大東亜戦争は、アジアの大変動をもたらした歴史的事件と記憶されるべきで

ある。欧州ではロシアが最大の勝者で、中国もやっとなり外国人の隷属に終止符が打てた。

日本は開戦敗戦を指導者層も認識していた「自爆戦争」だったが、「自存自衛」と「東亜の解放」への戦いに自ら突入した。対中国戦争は、「空間は捨てても時間は買う」という本来鯨呑し切れぬ巨大な中国に国防重要資源を求めて八十万の大軍を送ったが、ずるずると戦線を拡大し、引くに引けなくなつた。

石油がないと知ると南進し、東南アジアに向かったが、兵站を欠き、広大な地を守りきれなかった。結果、日本は敗北したが、アジアにおける西洋帝国主義の終焉を早めたことも事実だ。現地の義勇軍、防衛軍の育成に資し、白人にはかなわないという意識が変わり、反植民地・帝国主義と民族独立運動の少なうとも触媒とはなつた。東南アジアへの南進は、アジアでの大英帝国支配への挑戦でもあつた。アジアや中国に関心を強めたアメリカが衰退した英国の代理戦争を買って出たという構図が、大東亜戦争の実態であつた。「自存自衛」としたために、一億総玉碎の、幕引きの出来ない戦いとなり三年九か月の凄惨な戦いとなつた。ただ、無謀な自爆

戦争とだけで片づけるのは、戦死した多くの兵士、特攻隊員、国民の霊が浮かばれないし、意図したとしないに関わらず、世界の潮流を変えた戦争と捉えて初めて、戦後の日本の発展や、アジアの興隆が説明できるということだろ

う。(文責) 小野 博正



実記を読む会報告

担当幹事 小坂田 國雄

Tel&Fax 044-987-1531

osakadakunio5256@jcom.home.ne.jp

■第七十回

三月十四日開催、出席者八名。第四十七巻、第四十八巻『パリの記』

この間に、使節団はゴブラン織り(タペストリー)製造所、チョコレート製造所、天文台、裁判所、牢獄、クリストッフル金銀銅器製造所、唾院、盲院、香水製造所などを訪問見学した。相変わらずの久米邦武の精緻を極めた、見学した工場・工程・それぞれの生産物品の意義や歴史の描写に感心する。然し、久米の記述の細やかさには及ばなくも、江戸幕府時代から派遣の新見遣米使節、竹内遣欧使節、池田遣欧使節、徳川昭武一行等も、当時の現地の新聞が感嘆する熱心さで、夫々が西欧文の吸収に熱心であったことを、福沢諭吉『西洋事情』栗

本鋤雲『曉窓追録』を例に考えてみた。そして使節団がパリに入った頃に、パリに居た成島柳北の『航西日乗』と『木戸日記』から、当時の在パリの日本人留学生との相互交流の濃やかさを、それぞれの人脈図を辿って考えてみた。柳北と使節団は、天文台・裁判所・牢獄と一緒に見学しているが、その記述の微妙な違いにも注目してみた。また久米は、普仏戦争後のパリが、予想外に明るく豊かで淫刺していると、すっかりパリ(フランス)に好感している。そして、普仏戦争の戦禍より、パリ・コンミュンンの内戦の傷跡の方が激しいことを読み取った使節団の、とりわけ大久保利通は、帰国後、内治が大切と内務省を強化して、官僚システムを育てる一方で、佐賀の乱や西南戦争では、武士の反乱を徹底的に叩いて維新政府転覆の芽を除いた。フランスの学者モリス・ブロック博士の言を入れて、早急な共和政は反動も多いので、日本に合った漸進的西洋化を選んだのも、フランス革命後、パリ・コンミュンンまでの七十年を帝政・共和政をジグザグに歩んだフランスの歴史に学ぶことが多かった。パリは愉快させる文明の中核であった。

(文責) 小野 博正

■第七十一回

四月十一日開催。  
第五十二巻総説

面積・人口、歴史・政治、地理・気候、産業、貿易・運輸等についての記述。そのなかで「国民多分ニ、水平線ノ下ニ居住スルト謂モ可なり」等と表現される低湿地、天井川、濃霧、堤防、風車、洪水等の自然環境や、「貿易ノ業ニ長セルコト、欧州各国ニテ第一ナリト謂ヘシ」と表現される海外発展の歴史、独特な国民性などが親しみを込めて述べられる。



ロッテルダム市街(『実記』)

二月二十四日ベルギーからオランダに入ると、沼沢、風車など景観が一変する。市街の叙述にも「我本所深川ニ彷彿タリ」とある。一日目は静かで清潔な首都ハーグにある王宮でウイリアム三世の謁見がある。次のロッテルダムでは「大廈壯屋少シ、河道交錯シ、漕舟ヲ以テ重車ニ代ユ

ル」とあり、日・蘭の河川の対比が描かれる。造船所や鋳物工場を見学し、隆盛の基となるオランダ人の勤勉さを讃える。3日目 は嘗てのオランダの栄光が展示されている海軍省を訪問し。ハーグに戻り、森と王宮を見学。次いでポンペの案内で赴いたライデンは、「真ニ講文ノ郷ニヨロシ」とある清潔で静かな市街。大学付属博物館や考古学博物館等見学し、シーボルトのコレクションなどにも触れる。ここで「白ハ武國ナリ、

蘭ハ文國ナリ」と表現する白蘭(ベルギー人・オランダ人)の比較論、次いで宗教論が展開される。

第五十四巻アムステルダム

「当国第一ノ都邑」「府中ニハ、深川靈岸島ノ光景ヲ緬像スルナリ」と表現される盛んな港町。複雑な水路と開閉橋、煉瓦の家、石畳の街路、運河沿いの縦長家屋と、その造り方の記述。五泊し、離宮美術館・クリスタルパレス・ダイアモンド研磨場・銀器製造場を見学。一行は掘削中の北海・アムステルダムを結ぶ大運河に感銘を深くする。最終日は動物園。三月七日、プロシヤへ向かう。

るなど、くつろいだ空気が感じられる。

■第七十二回

(文責) 小林 富士雄  
五月九日開催、出席者十名。第四十九巻ベルギー国総説、第五十・五十一巻ベルギー国の記(上・下)。

パリから鉄道でやって来た使節団がブラッセルに入ったのは二月十七日。翌日、レオポルド二世に謁見する。レオポルド一世の時、オランダから独立したのが四十年前のこと。つまり新しい国家だが千年の歴史を持つ都市だけに古い石造りの壮麗な都市、「小さなパリ」といわれる。

使節団のブラッセル、そして

ベルギー滞在は六日間だけ。この間、官公庁の視察をはじめ鉄工場その他手分けをしながら見学。すべてが大工場だ。「人民ノ知識ハ駸々トシテ開明に赴キ四肢ノ勞ヲ頼マズシテ物力ヲ借ルノ術ヲ求メ」ていること、つまり機械化に改めて注目させられたが、そこで視たのは英・仏で目撃した設備・装置の壮大な縮刷版(欧州の合理性)といえる。

ルクスという結束の道に見出し、大国に伍して現在の繁栄を保っている。「筑紫の国」九州のサイズに過ぎないベルギーは、オランダ、ルクセンブルク、ドイツ、フランスと国境を接しドーバー海峡を隔ててイギリスとも向かいあう。「ヨーロッパの心臓」とも呼ばれるのは、たくましく鼓動する「小国」への尊稱であり、ベルギーが果たしつつある国際的な役割をも象徴している。

さて『実記』中のご愛嬌二

点。一行は近郊の戦跡ワテルローを視察、久米の興趣にまかせた講談調「英・仏、関ヶ原の戦況」の詳しい祖述がある。また、アントワープ美術館で巨匠ルーベンスの絵を模写している画家(彼は両手を欠き足で描く)の作品一幅を購入、なんとベルギー省内省に贈呈している。

ベルギーは面白い国だ。独立したからベルギー人が生まれたが、「ベルギー語」というものは無い。この複雑さ、変幻自在さは、何だろう。そういえば、アガサ・クリステイの名探偵ポワロ、そして

英訳実記を読む会報告  
担当幹事 岩崎洋三  
Tel & Fax 03-3488-0532  
iwasakiyz1116@gmail.com

てメグレ警部を活躍させる  
ジュールジュ・シメノンそのい  
づれもベルギー人である。  
(文責) 桑名 正行

■第七十一回  
三月二十七日  
開催。Ch. 90 A  
General Survey  
of European  
Geography and  
Transportation  
第九十章にお  
いて、久米は欧  
州の地勢の概略  
に触れてから、  
自然の富に人知  
を加えて産業を興し、その製  
品の貿易を陸運と水運を利用  
して拡大し、結果として国を  
豊かにする欧州諸国を富国の  
手本と評価する。とりわけ、  
交易に不可欠な陸路および水  
路による輸送の重要性を唱え  
る。19世紀初頭に英国から始  
まった蒸気機関車による鉄道  
事業は、十九世紀半ばには欧  
州主要国において急速に発展し  
ていくが、久米の記述から一  
八七三年当時、水路による内  
陸輸送もいまだその重要性を  
失ってはいなかった様子があ  
る。今日では観光名所  
として知られるフランスのミ  
ダイ運河も、当時は大西洋と  
欧州の主要貿易港のひとつ、  
マルセイユ港のある地中海を  
結ぶ内陸輸送の担い手だっ





スコットランド・インバースナイト滝 (『実記』)

た。  
 ここでやや脇道に逸れ、ミ  
 デイ運河建設とルイ十四世治  
 世下において重商主義に基づ  
 き絶対王政の完成を目指した  
 コルベールが行った一連の制  
 度改革との関連について、私  
 見をまとめた拙文を配布させ  
 ていただいた。

なお、コルベールの制度改  
 革に含まれる一六七三年の商  
 事令(陸上商法典)ならびに  
 一六八一年の海事令(海上商  
 法典)に関しては、第九十四  
 章「ヨーロッパ商業総論」  
 の中で、欧州の商法典はルイ  
 十四世の商法典をもって嚆矢  
 とすると述べられている。

(文責) 榎原 知子

■第百十二回

四月十八日、七名出席。

Ch. 91 A General Survey of  
 the Climate and Agriculture  
 of Europe を読む。欧州の気  
 候が赤道からの距離、緯度等  
 の関係のほか、海流、アルプ  
 ス山地など国と地域によって  
 特色づけられると説明した

後、各国の農業生産力を数字

をあげて比較。欧州では農業  
 の主要産品、穀物では小麦の  
 生産が盛んだが、日本や中国  
 では麦類を「燕麦」と表現す  
 るように、いわば鳥の食べ物  
 と見なし等閑視されてきた  
 (英訳も注釈に中国の古典、  
 資治通鑑等を引用)とし、久  
 米は麦類を食用として改めて  
 見直す必要があると力説す  
 る。農業に関連して種々の植  
 物、樹木が列挙されており英  
 訳者の苦勞が察せられる。農  
 業振興のため英国では十九世  
 紀半ば王立農業協会がおかれ  
 たが、仏国では英に先んじ十  
 八世紀に農業改革運動の先導  
 者が現われ、農獣医専門学校  
 設立、全国に農業教育普及、  
 農業長官職をおくなど積極的  
 に農業振興を図ってきたこと  
 を教えられる。

なお、現在の食料自給率  
 (二〇一〇年度)は英、独、  
 仏が九二〜一七二%に対し、  
 日本  
 は七〇%(カロリーベースで  
 は四〇%)。日本の農業のあ  
 り方について改めて考えさせ  
 られた。

(文責) 大森 東亜

■第百十三回

五月二十三日開催。

A General Survey of Europe-  
 an Industry)  
 久米は「第九十二巻 欧羅  
 巴洲工業総論」において、産

業革命がそれぞれの欧州先進  
 国の社会や経済にいかなるイ  
 ンパクトを与えたかを総括し  
 ている。特に、鉱物資源の活  
 用、その中でも石炭エネルギー  
 ギーが、輸送を始め様々な製  
 造業の機械化に用いられるこ  
 とよって生産性が飛躍的向上  
 し、それが人間社会や価値観  
 にどのような影響を与えたか  
 を客観的に観察している。

こうして産業が高度に発達  
 したイギリスでは、人々は経  
 済活動において、必然的に経  
 営者側と労働者階級に分断さ  
 れ、双方が富の配分について  
 公然と争うようになってきて  
 いることを、久米は驚きと警  
 戒心をもって記述している。

両者間の社会的軋轢を緩和  
 するため、経営側は家父長的  
 精神をもって労働条件向上や  
 生活保護の為の施策を打ち出  
 す。また、富の源泉である発  
 明やイノベーションを法的に  
 保護(特許制度)しながら  
 もって、他方では裁判手続きを  
 円満かつ公正に、解決し  
 ようとする努力がなされてい  
 ることを、久米は注意深く考  
 察している。

これらの考察が明治新政府  
 によって真剣に取り上げら  
 れ、日本が着実に法治国家と  
 して整備されていくことに繋  
 がったの言うまでもない。

(文責) 井上 泰

関西支部報告

担当幹事 難波 康熙



namba@jttk.zaq.ne.jp

■第六十五回

三月九日開  
 催、出席者八  
 名。第二編(英  
 吉利国の部)の  
 第三十二巻ハイ  
 ランド 山水の  
 記。

スコットラン  
 ドは英国の単な  
 る北部地方をい  
 うのではなく、  
 長年ずつとイン  
 グランドと対抗し、争い続け  
 た独立国としての歴史を持  
 つ。今日でもスコットランド  
 の独立国としての地位を再び  
 回復しようとする運動さえあ  
 る。

近代日本にとって、スコッ  
 トランドは既に英国の一部を  
 なしていたがイングランドと  
 同様、あるいはイングランド  
 以上に重要であり、影響を受  
 けた。明治のお雇い外人や貿  
 易商の英国人は実はスコット  
 ランド人であった人も少なく  
 ない。

明治維新をもたらした倒幕  
 勢力を支えたJ. B. グラバー  
 はスコットランド北西端のア  
 バダイーンの出身である。さ  
 らに、明治日本の近代技術教  
 育の発展において、スコット  
 ランド人技術者や教育者が果  
 たした役割がいかに大きかつ  
 たかについて、わが国ではあ  
 まり知られていない。

■第六十六回

四月二十七日開催、出席者  
 七名。第二編(英吉利国の  
 部)の第三十二巻ハイランド  
 山水の記。

『実記』は「高地(Glen)ノ  
 地方ニハ主に「セルチッ  
 ク」(ケルト系)人種住シ、  
 スコット語(ゲール語)ヲナ  
 ス、……人種ハ蘇部(Scythians  
 )ニ三百余万人アリ、風俗  
 ミナ樸魯(素朴)ニシテ……  
 云々」と、先住民のケルト系  
 の民族について言及してい  
 る。

『実記』輪読の後、イラン  
 駐在中にイラン革命が起きる  
 という政変に遭った会員の木  
 全氏に、イランの話をして頂  
 いた。中東の石油への依存度  
 が高い日本にとって鍵を握る  
 イランだが、イスラム国家と  
 いうこともあってか我々にあ  
 まり知識がなく、非常に面白  
 く話を聞くことが出来た。日  
 本企業のイランとの関わりな  
 ども興味深く聞いた。

紀元前十一世紀から始ま  
 り、キュロス大王によってオ  
 リエントを統一したアケメネ  
 ス朝ペルシャ、さらにローマ  
 帝国に対しても優位を保った  
 ササーン朝ペルシャの歴史な  
 どは、イスラム・イラン革命  
 など紆余曲折があったもの  
 の、今日でもイラン人の心に  
 誇り高く生きていくことを  
 知った。

(文責) 難波 康熙

特定非営利活動法人  
「米欧亜回覧の会」ご案内

**趣旨** この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。  
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。  
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

**会員** 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

**例会** 年に4回、全体例会があります。

**部会** テーマ別に読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

**機関紙** 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

**役員** 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

**会費** 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、仮入会希望者、学生には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

**事務局** 「米欧亜回覧の会」  
〒135-0021  
東京都江東区白河 4-9-14-1407  
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp  
TEL:090-4723-9705 FAX:03-3641-9407

**入会申込**  
入会申込書はホームページと事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。  
なお年会費などのお支払いは下記のゆうちょ銀行口座への払込(振込)をご利用ください。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等  
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

\*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2013年7月～10月の予定です

☆7月全体例会

日時:平成25年 7月25日(木) 13:30～17:00

第1部 例会 13:30～14:15

第2部 講演会 14:30～10:00

テーマ:国政選挙の理想と現実

講師:保阪正康氏

場所:国際文化会館

会費:2,000円(同伴ゲスト1,000円)

懇親会:楓林(会費5,000円) 17:15～19:00

☆実記を読む会

日時:7月4・5日(木・金) 担当:橋本氏

「納涼と映画鑑賞の会」(奥多摩園)

9月12日(木) 14:00～ 担当:井上氏

10月10日(木) 14:00～ 担当:高橋氏

場所:国際文化会館401号室

会費:1,000円

☆英訳実記を読む会

日時:7月17日(水) 14:00～ 担当:斎藤氏

9月18日(水) 14:00～

10月17日(木) 14:00～

場所:銀座ルノアール・マイスペースニュー新宿3丁目店

☆歴史部会

日時:7月19日(金) 18:00～21:00

テーマ:「福沢諭吉 そのアキレス腱」(泉三郎氏)

日時:9月17日(火) 18:00～21:00

テーマ:「福地源一郎ーセカンドベストの探求者」

(五百旗頭薫氏、東京大学准教授)

場所:国際文化会館404号室

会費:1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日程:8月24日(土) 13:30～17:00

テーマ:世界に通用する新しい日本像を求めて

場所:国際文化会館Dルーム

☆関西支部例会

日時:8月24日(土) 12:30集合～16:30

昼食懇談会を持ち、13時より会合。

場所:大阪弥生会館

編集後記

◇設立十五周年の昨年度は記念小論集の発刊に全力を注ぎ、実現することができました。四月に平成二十五年度の総会が開催され、NPO法人としての新年度がスタートすると、暫くお休みしていた活動が動き出しました。五月には、松代、佐久、小諸を巡る久々の歴史ツアー(三・四頁)が行われ、八月からグローバルジャパン研究会が再開します。  
◇部会活動も活発で、当分の半分近くを占めています。当会の機軸である、実記を読む会は第七十二回、英訳実記を読む会も第七十三回と着実に回を重ねています。部会報告の六頁、七頁には報告回(章)に合わせた銅板画を掲載するようにしていますが、英訳実記を読む会は、十二カ国の回覧を終えて、銅板画のない「総論」の章に至りました。そこで、七頁の銅板画は関西支部の輪読章のスコットランドとしました。英訳実記を読む会は、帰国(完読)まで残り十回をきったことになりました。  
◇長らく事務局を担当していた小松さんに替わって、古俣美樹さんに事務局長のサポートをしていただくことになりました。宜しくお願いたします。  
(N)



米欧亜回覧の会 平成24年度(2012年度)活動報告 (平成24年4月～平成25年3月)

	全体例会	実記を読む会	英訳実記を読む会	歴史部会	グローバル・ジャパン研究会	広報・メディア委員会	関西支部	15周年記念小論文集
平成24年	第63回例会(5/8) NPO年次総会 パネルディスカッション 「米欧回覧実記と私 ～実記が語った事、語らなかつた事」	第160回実記を読む会(4/12) 第30巻グラスゴー市の記	第101回英訳読む会 (4/19)	「幕末維新期海外派遣使節団 と留学生」 泉三郎氏(4/16)			第59回例会(4/25)	編集委員会 編集委員会(4/12)
5月		第161回実記を読む会(5/10) 第28巻マンチェスター市の記上 第29巻マンチェスター市の記下	第102回英訳読む会 (5/8)	「岩倉使節団の裏方、 その裏方の頭領・田邊運舟」 田邊康雄氏(5/21)				編集委員会(5/22) レイアウト全般校正(5/30)
6月		第162回実記を読む会(6/14) 第33巻ニューキャスル市の記上 第34巻ニューキャスル市の記下	第103回英訳読む会 (6/21)			会報67号	第60回例会(6/30)	
7月		第163回実記を読む会 (7/12&13) 映画鑑賞と納涼の集い 奥多摩園	第104回英訳読む会 (7/25)	「慶應藩第二次米国留学生 大原令之介を語る」 吉原重和氏(7/24)				最終編集委員会(7/2) 小論文印刷完成(7/18)
8月	第64回例会(8/4) パネルディスカッション 今、明治維新と岩倉使節団の 意義を問う～平成維新をどう 進めるのか？日本の未来は？～				第64回例会(8/4) パネルディスカッション 今、明治維新と岩倉使節団の 意義を問う～平成維新をどう 進めるのか？日本の未来は？～			例会で会員に配布(8/4)
9月		第164回実記を読む会(9/13) 第35巻ブラッドフォード市の記 第37巻スタッフォード州と ワーリック州の記	第105回英訳読む会 (9/19)	「読書会『最後の将軍』を読んで 徳川慶喜を語る」 会員有志(9/20)			第61回例会(9/20)	
10月	第65回例会(10/28) 合評会 記念小論集 「岩倉使節団と米欧回覧実記」	第165回実記を読む会(10/11) 第36巻シェフィールド市の記 第40巻ロンドン市後記	第106回英訳読む会 (10/23)	「高橋是清一生運 学び続けた実践の人」 井上素氏(10/22)		会報68号	第62回例会(10/20)	第65回例会(10/28) 合評会 記念小論集 「岩倉使節団と米欧回覧実記」
11月		第166回実記を読む会(11/8) 第31巻エディンバラ市の記 第32巻ハイランド観光の旅	第107回英訳読む会 (11/22)	「中江兆民-破格の明治人」 芳野健二氏(11/29)			第63回例会(11/21)	
12月		第167回実記を読む会(12/13) 第38巻バーミンガム市の記 第39巻チャーシャー州の記	第108回英訳読む会 (12/20)			会報69号		
平成25年	第66回例会(1/18) 「新年懇親例会」 テーマ「日本」 明治記念館相生の間	第168回実記を読む会(1/10) 第40巻フランス国税 第44巻パリ市の記	第109回英訳読む会 (1/23)		第66回例会(1/18) 「新年懇親例会」 テーマ「日本」 明治記念館相生の間		第64回例会(1/30)	
2月		第169回実記を読む会(2/14) 第45巻パリ市の記4 第46巻パリ市の記5	第110回英訳読む会 (2/21)					
3月		第170回実記を読む会(3/14) 第47巻パリ市の記6 第48巻パリ市の記7	第111回英訳読む会 (3/27)	「近現代史に学ぶ-新視点」 吹田尚一氏(3/17)		会報70号		

米欧亜回覧の会 平成25年度(2013年度)事業計画書

事業名	事業内容	実施予定日時	実施予定場所	従事者(NPOスタッフ)の予定人数	受益対象者の範囲と予定人数	支出見込額
講演会/研究会	年6回 交流・交歓会年1回	5月、6月、9月、10月、11月、1月	国際文化会館他	各回 5～10名	会員/一般市民: 講演会(各回)約50名、 交流・交歓会90名	120万円
部会活動(注)	研究及び啓発活動	部会により毎月又は年4回	国際文化会館他	各回 3～5名	会員/一般市民: 各回約25名	上記に含む
会報発行	会報発行による研究・啓発活動	季刊(年4回)	事務局他	各号 5～10名	会員/一般市民: 各号約500部	36万円

1. 事業実施の方針 平成25年度の事業の中心を、講演会/研究会、部会活動、会報(ニュース)発行の3本柱とする。
  2. 事業実施に関する事項は上記のとおり。
- 注) 部会とは以下の6部会のことをいう。

実記を読む会、英訳実記を読む会、歴史部会、グローバルジャパン研究会、関西支部、広報・メディア委員会

## 平成24年度(2012年度) 会計収支計算書

平成24年度  
特定非営利活動にかかる事業  
会計収支計算書平成24年4月1日から  
平成25年3月31日まで特定非営利活動法人  
米欧亜回覧の会

科 目	金 額	
I 収入の部		
1 会費・入会金収入		
入会金収入	10,000	
会費収入	587,000	587,000
2 事業収入		
講演会等事業収入 (部会活動収入を含む)	788,579	788,579
3 寄付金・賛助金		
活動支援金・寄付金	659,000	
記念小論集賛助金	216,500	875,500
4 その他収入		
利息収入	191	191
当期収入合計(A)		2,281,270
前期繰越収支差額		564,491
収 入 合 計(B)		2,825,761
II 支出の部		
1 事業費		
〔1〕 講演会等事業費	639,249	
〔2〕 会報発行印刷費	122,430	
〔3〕 15周年記念小論集発刊費	340,382	
〔4〕 郵送費・託送費	218,837	1,320,898
2 管理費		
電話・通信費	179,905	
会議費	120,165	
事務費	168,172	
事務委託費	90,000	558,242
当期支出合計(C)		1,879,140
当期収支差額(A) - (C)		382,130
次期繰越収支差額(B) - (C)		946,621

## 平成25年度(2013年度) 会計収支予算書

平成25年度  
特定非営利活動にかかる事業  
会計収支予算書平成25年4月1日から  
平成26年3月31日まで特定非営利活動法人  
米欧亜回覧の会

科 目	金 額	
I 収入の部		
1 会費・入会金収入		
入会金収入	50,000	
会費収入	600,000	650,000
2 事業収入		
講演会等事業収入 (部会活動収入を含む)	800,000	800,000
3 賛助金・寄付金		
	100,000	100,000
4 その他収入		
利息収入他		
当期収入合計(A)		1,550,000
前期繰越収支差額		946,621
収 入 合 計(B)		2,496,621
II 支出の部		
1 事業費		
〔1〕 講演会等事業費	700,000	
〔2〕 会報発行事業費 (印刷費)	300,000 (180,000)	
(郵送費)	(120,000)	1,000,000
2 管理費		
電話・通信費	180,000	
会議費	100,000	
事務費	150,000	
事務委託費	360,000	790,000
当期支出合計(C)		1,790,000
当期収支差額(A) - (C)		△240,000
次期繰越収支差額(B) - (C)		706,621

(単位：円)